

道徳科における主体的・対話的で深い学び

研究代表者 船越 勝（和歌山大学教育学部）
共同研究者 伊澤真佐子（和歌山市立名草小学校）
田中 千映（附属小学校）
湊本 祐也（附属小学校）

1. 研究の目的とプロジェクトの計画

新しい学習指導要領が求める学びのあり方として、主体的・対話的で深い学びが提唱されているが、特別の教科に新たになった道徳科も同じ課題が要請されている。このプロジェクトでは、共同研究者である附属小の田中教諭と湊本教諭が、こうした課題に応える道徳科の授業を開発するとともに、研究代表者である船越と前代表の伊澤校長先生がその開発をアクションリサーチの視点から支援しつつ、共同研究を進めてきた。（船越）

2. 小学校6年道徳科「「絆」～共によりよく生きるために～」授業実践

（1）単元のねらいと構成

本実践では、「よりよい人間関係を築いていくためには、どのような心のもち方や考え、行動をしていく必要があるか考え、仲間と共に「絆」をよりよく深めていこうとする心情を育てる」を単元のねらいとして、B（主として人との関わりに関すること）とC（主として集団や社会との関わりに関すること）の内容項目に関わりのある教材で4時間構成の道徳科の授業を行った。

本校では、よりよい問題解決を行っている学びを『探究』とし、「既存の知識・技能を活用しながら主体的に考え判断したり、協働したり、自己の学びを省察したりし、よりよく問題解決する学び」と定義している。

6年生道徳科において引き出したい子どもの『探究』の姿を以下の2つとした。

- ・学習課題に対して、自己の生き方と照らし合わせながら、自分事として、考え方や心のもち方、行動の仕方を考えようとしたり、自分の生活のどのような場面で生かせそうかを考えようとしたりする姿
- ・感じ方や考え方を交流する中で、自分とは違う根拠や考え方があることを理解しようとしたり、自分のものの見方や当たり前だと思っていることを問い直そうとしたりする姿

（2）本実践における4つのしかけ

本実践（単元名「絆」～共によりよく生きるために～）において、上記の子どもの姿を目指すために、以下の4つの「しかけ」を行うことにした。

一つ目は、自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定を行い、1時間の学びが自分の生活の何につながるのか見通しをもち学習することができるようにする。本単元では、学級目標の一つである「絆」をとりあげ、『絆』を深めるためにはどのような心のもち方が大切なのだろう」を三回の道徳の時間で考えていくことにする。考えたことが自分の生活の何につながっているのかを意識しやすい環境をつくることで、今後の自己の

生き方につなげていこうとする実践意欲や態度も養いやすいと考える。

二つ目は、グループでの話し合いを適宜取り入れる。気持ちや理由などは言葉で表現しやすいが、「ねらい」にせまる「中心発問」の場面では、思いや考えをもつことができても、それを言葉で明確に表現することの難しさが考えられる。その際に、グループでの話し合いを取り入れることで、考えや言葉を補足し合うことができる。また少人数での話し合いは、友達と違った視点であっても意見を伝えやすく、多面的・多角的な考えを出しやすいと考える。さらに、子どもたちは関わり合うことや力を合わせることの価値を実感できると考える。

三つ目は、毎時間の展開後段では、学習課題について自分が見つけた答え（納得解）をメンチメーターに打ち込む活動を行う。またそれを全体で共有する。友達が見つけた答え（納得解）と自分が見つけた答え（納得解）を照らし合わせながら再度学びを問い直すことができると考える。

四つ目は、「振り返り」を行う際には、3つの視点（(1)今日の学習で考えたこと(2)自分に振り返って(3)これからの生活に生かしたいこと）を与えて書かせる。特に(2)や(3)の視点を設けることは、「振り返り」を書く中で、これまでの自分の考え方や心のもち方、行動の仕方を問い直そうとする姿や自分の生活につなげて考えようとする姿を見ることができると考える。

（3）本実践の振り返り

本実践では、第1時で学級目標である「絆」について、どのくらい達成できているのかを振り返った。10～65パーセントで、まだまだ「絆」を深めていく必要があることを子どもたちと共有できた。第2時以降に、「共によりよく生きる～『絆』を深めるために～は、どのような心のもち方が大切なのだろう。」を単元を通した学習課題にしていくことを子どもたちと共有した。第2時以降は、「25人でつないだ金メダル」（Cよりよい学校生活、集団生活の充実）「人間を作る道 一剣道一」（B礼儀）「エルトゥール号ー日本とトルコのつながりー」（C国際理解、国際親善）の教材を取り入れて、授業を行った。

（4）実践をして

単元を通した学習課題「共によりよく生きる～『絆』を深めるために～は、どのような心のもち方が大切なのだろう」を設定したことで、毎時間の「振り返り」を書く時には、自分たちの「絆」と重ねて考えている子も見られた。また「エルトゥール号ートルコと日本の絆ー」の授業において、「どんな思いで串本の人たちはトルコの人たちを助けようとしたのか」を発問した際、「剣道の時（前の道徳）と同じなんだけど、相手を思いやる気持ちがあって、それと同じなんじゃないかなと思った。めちゃくちゃ傷ついていて、海も寒くて、トルコの人もかわいそうだと思って」という発言が見られた。下線部のような発言が見られたのも、「共によりよく生きるー「絆」を深めるためにー」に関わる教材を中心に単元を組んだことで、子どもたちの意識が継続していたからだと考える。

また、「エルトゥール号ートルコと日本の絆ー」の中で、中心発問「どんな心が日本とトルコの絆をつないでいるのか」を話し合う際には、グループでの話し合いを取り入れた。この時、グループの友達の意見を聞いてさらに考えようとする子どもたちの姿を見ることができた。また、本音や人間の弱さの部分を素直に出し合う様子も見られた。本音や弱さの部分については小さな人数での話し合いだからこそ、出し合うことができたのだと考え

ている。

第2時から第4時までの授業の「振り返り」の記述には、ほとんどの子が資料のみにとどまらず、自分たちの生活に基づく記述が見られた。これは、「振り返り」を書かせる際に、「自分に振り返って」「これからの生活に生かしたいこと」の視点を設けたことで、再度自分の生き方や生活と照らし合わせて考えることができたと考えている。

第2時から第4時を通して、学習課題についての自分の答え（納得解）をメンチメーターに打ち込むみ、全体に共有することも行った。しかし、半数の子どもたちは、メンチメーターに自分の答えを打ち込むと、友達が打ち込んだことを気にすることなく、すぐに「振り返り」を書く様子が見られた。それまでの話し合いで、子どもたちは自分の答え（納得解）を見つけていたため、必要性を感じなかったのではないかと思っている。メンチメーターに記入を行わず、全体での話し合いに時間をかけることで、さらに新しいものの見方や深まりが見られたかもしれない。

単元をとおした学習課題の設定、振り返りの視点、グループでの話し合いなどのしかけは、引き出したい『探究』の姿に効果が見られたと考えることができる。

しかし、自分事になるためには、子どもたちに他教科・他領域で学習課題に関わる共通の体験を十分させておく必要があったとも考えられる。日々の道德教育を深める役割のある道德科の授業においては、子どもたちが共通の土台の元で話し合いができるように、他教科・他領域との関連も重視していきたい。また、学びを「振り返る」にあたっては、友達の考えから学んだことや、最初に考えていたことと比べるとという視点を取り入れることで、自己の変容についても振り返ることができると思う。

今回の実践を通して見つかった課題を生かし、今後も「自分事として、自己の生き方と照らし合わせ考えようとしたり、自分の考え方や心のもち方、行動の仕方を問い直そうとしたりする姿」が見られる道德科の授業を探っていきたい。（田中千映）

3. 小学校第3学年道德科「いじめをなくすには・・・」授業実践

（1）学級の子どもの姿と本実践のねらい

本実践では、「いじめ」の問題をテーマに、小学校3年生を対象に道德科の授業実践を行った。本実践における主張点は「いじめの問題を『いじめられる立場』『いじめる立場』『いじめを見ている立場』の3つの立場からそれぞれの気持ちを考えさせ、表現させることで、いじめの問題について深く考え、友達と考えを共有しながら、自分の生き方について考えようとする姿が見られるであろう」である。

本学級（和歌山大学教育学部附属小学校3年A組）の子どもたちは、仲間思いの子どもが多く何事にも協力して助け合う姿が多く見られる子どもたちである。学校生活に関するアンケートでは「学校は楽しい」と回答する児童も多く、情緒的に落ち着いた学校生活を過ごすことができている。その反面、よく考えずにしてしまった行動・言動から相手を不意に傷つけてしまう子どもや、自分の考えや思いを上手に伝えられない子どももいる。これからの成長過程のなかでよりより人間関係を築いていくためには、自分の立場だけでなく様々な人の立場に立って気持ちを想像していく必要がある。小学校3年生という発達段階も考慮しながら、「いじめ」という自分たちの身近に起こりうる問題について考えることは、他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うことに繋がると考える。友

達と考えを交流し、「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場から、いじめをなくすためにはどんなことが大切なのかを深く考える学習にしたいという思いから本実践を始めた。

いじめの問題を道徳科で扱うことは、いじめを未然に防ぐ力や解決していく力に大きく寄与すると考える。また「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場になって、多角的な視点からそれぞれの気持ちを考えることは豊かな人間関係を構築していく一助となるはずである。教材との出会いを通していじめの当事者意識をもち、それぞれの登場人物の気持ちに寄り添うことや、いじめ問題を俯瞰的に見て原因や探っていく活動を通して、他者とよりよく生きていこうとする心情を育むことが期待できる。道徳科における内容項目A（善悪の判断、自律、自由と責任）、B（公正、公平、社会正義）に関わって、本単元の学習で考えたことをもとにして、いじめの問題を自分たちの学校生活をよりよくしていくためにみんなに啓発していく活動を、総合的な学習の時間と関連させて取り組んだ。

本実践における引き出したい『探究』の姿は、いじめの場面を捉えた教材を読んで感じたことや考えたことを、「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場の気持ちを想像する学習を通して、どのような気持ちがいじめを起こしてしまうのか、またどのような気持ちがいじめを止めることができるのかについて考える姿である。また、友達と考えを比べたり繋げたりしながら、互いの考えを尊重し合い、自分の考えを深めたり広げたりする姿も引き出すことができるように実践を行っている。

（2）本実践における3つのしかけ

子どもたちが豊かに学び合う姿を引き出すために、次の3つのしかけを道徳科の授業の中で行っている。1つ目のしかけとして、系統性をもったカリキュラムで道徳科の学びを進めたことである。「いじめ」という問題について、単発（1時間扱い）の学習だけでは、ただ「いじめはよくない」という結論に至るだけの浅い学びにしかならないことが予想される。より考えを深め、そして子どもたちで広げていくためには系統的にカリキュラムを作り、実践していく必要があると考え単元計画を立てた。本単元では、まずいじめという事象について「気付く」「知る」ところから始める。個人差はあると考えられるが、小学校3年生の段階において、いじめ問題について見たり聞いたりした経験がなく、具体的にどのようなことなのか想像することが難しいことが予想される。そこで単元の導入ではいじめの場面を捉えたイラストなどを用いて、丁寧にいじめ問題を捉える活動を行った。様々ないじめの場面を学習していくなかで、「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場の気持ちを「心カード」に蓄積していき、後の話し合い活動で活用できるようにする。このようなカリキュラムのしかけにより、子どもたちは個人でいじめ問題について深く思考し、自分らしく表現を行い、友達と積極的に意見交流する姿が見られた。

2つ目はICT機器の活用である。1人1台のタブレットPCを活用し、前述の「心カード」の作成や共有（ロイノート）、ふりかえり活動などに活用している。「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場をそれぞれ色別のカードで示し、シンキングツール（Yチャート）を使って自分の考えを分類して整理を行う（例：「いじめられる立場（薄緑）」…「どうして私だけ仲間外れにされるんだろう」）。そして自分の

考えを「提出箱」に入れ、友達と見せ合い交流する場面をつくった。このような ICT 機器の活用は、たくさんの考えを出し合い、話し合いのなかで練り上げていく道徳の学習と親和性が高いことが考えられる。さらに本単元では、発展的な活動としていじめ問題を学校全体に啓発していく活動を行う予定であるが、その中でも ICT 機器を効果的に用いることで、より柔軟に表現活動ができることが予想される。このように道徳科の学びに ICT 機器を効果的に活用していくことで、自分の考えを表現する幅が広がり、視覚的にも分かりやすく友達と意見を共有し、より深く広くいじめの問題について考える姿が見られた。

3つ目は評価活動の工夫である。本単元の学びにおいて、道徳的価値について自覚を深める学びを実現していくためには、「いじめはよくない」(行動)、「かわいそうだと思う」(心情)で止まることなく、さらにその中核にある「道徳的な考え方」「生き方」についてアプローチしていくことが不可欠である。上記の2つのしかけを本単元の学びに盛り込みながら、教師からの評価(子どもの発言に対するフィードバック、ふりかえりの評価)も、道徳的価値について自覚を深める学びを意識し行った。とくに教師からの「問い返し」の場面は重要であると考え、机間指導をとおして細やかな指導を心がけた。「どういうところがかわいそうだと思いますか?」「もし自分だったら、どうしたい?」など個別に問いかけ、「自分事」としていじめの問題に向き合うような支援も行い、一緒に考える時間を大切にしました。子どもたちの振り返りでは、「仲間の気持ちを考えて言葉を使う事は大切だと思いました」という言葉や、「きらいな人や自分が苦手だと思う人でも、無視をしたり仲間外れにすることはしてはいけない」、「仲間という言葉大切にしたい」といったことを書くことができている。

(3) 本実践の発達の価値と今後の課題

本実践では道徳科において「いじめ」の問題を取り上げ、授業実践を行った。令和3年度におけるいじめの認知件数は615351件と過去最高となっており、学校現場においていじめ問題に対応していくことは喫緊の課題となっている。特に小学校3年生という小学校中学年の発達段階においては、相手の立場になって考えたり、トラブルを予見して行動を考えたりすることなどが未熟なところもあり、道徳科で人とのより良いコミュニケーションを考える機会を担うところは大きい。また友達と意見を交流させながら、いろいろな価値観について知り、互いに言葉を交わすことも大切であると考えます。

上記の道徳科の学びを実現するためには、週に1時間の道徳の時間を、子どもたちも教師も大切な学びの場と意識することが欠かせない。本実践では、子どもたちが自分なりに道徳科を学ぶことの意味を見出し、自己の生き方に繋げていくような姿を引き出せるようにカリキュラムの工夫やICTの活用、評価の工夫などに取り組んできた。今後もさらに道徳科の学習が有意義なものになるように教材や指導法について研究を重ね、実践していきたい。(湊本祐也)

3. プロジェクトの成果と課題

(1) 時代の課題としてのダイバーシティ

ダイバーシティ(diversity)とは、近年様々な分野で注目されるようになった概念であるが、一般的には多様性と訳されている。ダイバーシティは、元々は1964年にアメリカで公民権法が制定されたことが一つのきっかけになり、1970年代にかけて、女性やマイノ

リティへの差別が社会的に批判されるなかで、「ジェンダー、人種、民族、年齢における違い」を指すこととされてきた。そうしたなかで、今日では、「身体的あるいは文化的な差異があっても受け入れ、個性を尊重する考え方や姿勢」をも示すものへと発展してきた。

今回の2つの道徳の授業は、人種や民族の「違い」の尊重と交流の大切さを学ぶ国際交流と、子ども同士の間での「違い」を理由にした異質排除のいじめの人権侵害性とその克服を学ぶものである。ともにこうしたダイバーシティや多様性の尊重と、異質な存在を排除するのではなく、包摂するインクルージョンの重要性を課題にしているという点では、きわめて現代的な課題にチャレンジしている実践だといえることができる。

(2) 国際理解を学ぶ

田中実践は、上記で説明したように、国際理解の大切さに取り組む実践であるが、同時に、「エルトゥール号ー日本とトルコのつながりー」は和歌山県の郷土教材としても長く大切にされてきたものであり、国際交流・国際親善の意義についての理解を深めるとともに、和歌山の先人の行動から和歌山への愛着と誇りを学んでいくふるさと学習としての性格も持った実践になっている。しかし、こうした「深い学び」として実践を展開していくためには、教師として子どもの学びの創造に迫る何らかの「しかけ」を用意することが必要で、それが田中実践では、①生活につながる学習課題の設定と見通しの獲得、②グループ学習の活用、③自分の見つけた答え（納得解）と仲間が見つけた答え（納得解）との対話と交流、④ふりかえりの視点の明確化である。こうした主体的で、対話的な学びの実践こそが子どもたちの「深い学び」を紡ぎ出すのであり、本実践が道徳科における「主体的で対話的な深い学び」に迫る実践だと評価することができる。

(3) いじめをどう教えるか

湊本実践は、報告の中でもふれられているように、いじめは文部科学省の「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（2022. 10.27 発表）でも明らかにされているように、認知されている件数だけでも615351件で、その6分の5に当たる500562件が小学校で起こっており、いじめ問題はまさに小学校が主戦場になっている大きな解決すべき実践課題である。湊本実践では、第一に、道徳の教科書の教材をもとにした「いじめをなくすには・・・」の学習を、「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場からその気持ちを探究し、それを「心カード」に表現し、蓄積していくことによって、いじめがいかに仲間の人権を侵害する行為であるとともに、そのいじめにストップをかけるためには、傍観者ではなく、自分事として考え、生き方に迫っていくことが大切であることを学ぶことができる実践になっている。第二に、小学校の中学年は、発達研究に即していえば、自己客観視が少しずつできるようになったり、同質同等の考え方から、異質同等の考え方に移行していったりする時期なので、こうした「違い」を伴った多様な立場から考察するのは、発達課題に合致していると言える。第三に、こうした仲間の「違い」を尊重する多様性・ダイバーシティの認識を獲得したうえで、この実践は後半、総合的な学習の時間とカリキュラムデザインして、いじめがない、よりよい附属小学校にするにはどうしたらよいかという一人ひとりの行動と態度の形成にシフトして行っているところも注目される。

こうした今年度の成果を踏まえ、附属小学校の道徳部の来年度の実践のさらなる発展に期待したい。（船越）